

式内社阿伎留神社の周辺と宮司阿留多伎家の土師氏系図の紹介

大谷 光 男

阿伎留神社の周辺

この小稿で紹介する阿留多伎家の土師氏系図とは、東京都あきる野市五日市にある式内社阿伎留神社の宮司、阿留多伎家が代々加筆する土師氏系図であつて、現存するものは明治三年（一八七〇）に、当時の宮司である貞吉氏が一筆で清書した系図である。料紙は楮紙で三枚に綴られ、縦の寸法は二七七ミリ前後で袋綴である。土師氏は奈良時代には武蔵国にも少数であるが分布しており、武蔵国分寺址から出土した古瓦に、奉納した「白方郷土師角麻呂」「土師部勝万呂」二人の刻名がみえる（大川清『武蔵国分寺古瓦博文字考』早稲田大学考古学研究室報告第5冊、一九五八年）。白方郷は豊島郡占方郷という説があるが、多磨郡狛江郷の可能性もある。

『新編武蔵風土記稿』多磨郡五日市村の阿伎留神社の記述に（文化年間）、「寛永年間ゆへありて春日明神を称し始めしとて社内に春日大明神の五文字を扁額せり」とあるのは、唯一神道の吉田家の提案で改称したらしく、さらに「神主有竹長門は吉田家の配下なり、^①とある有竹は阿留多伎の通称で、かつ天保三年（一八三二）十二月のこと、宮司長門之助は吉田家が阿伎留神社の社号を春日明神と改称するなど、神社への干渉に立腹、幕府公認の吉田家の許状装束を廃し、吉田家は「長

門之助異形之装束着用いたし、吉田家申付を相拒候」ということで、寺社奉行に「差上申一札之事」の訴状を提出、結果は「若相背候ハ、重料可^レ被^ニ仰付^一候、仍而御受証文差上申所如^レ件」という裁決が下されている（稲葉丹後守様御懸^ニ而御裁許被^ニ仰渡^一写」鈴木家文書(3)―13)。

阿留多伎宮司家が土師氏の出自であることの証拠は、所蔵の系図が天穗日命を遠祖としていること、「^{武蔵}土師連男塩」とある二点である。問題となる箇所を指摘すれば、阿留多伎家が中央の歴史の舞台に登場していないにもかかわらず、畔切神が元慶八年(八八四)七月十五日癸酉に、勲等では武蔵国中で最高位の勲六等に叙せられていることである。

阿伎留神社は秩父山系(古生層)の秩父盆地・小川盆地と点在する五日市盆地にあり、かつては多磨郡小川郷(天文十一年三月十日、北条氏照印判状 畔切宮為御神領)であつたが、伴信友が『神名帳考証』(文化十年)に伊奈郷とあるのは誤りである。風土記稿は秋留郷高倉庄に属とあるが、いまは清水正健編『莊園志料』武蔵国多磨郡の記載にしたがう。

阿伎留神社の地域は小塩と称した。現在は五日市字松原ヶ谷戸に鎮座する。『延喜式』神名上の多磨郡には、阿伎留神社とあり、『三代実録』元慶八年七月十五日癸酉には「武蔵国正五位上勲六等畔切神從四位下」とある。天正十九年(一五九一)十一月の徳川家康の朱印状には「多西郡秋留郷、大明神」とあつて、すでに吉田家の関与がうかわれる。なお『和名類聚抄』上野国群馬郡内に畔切郷あり、畔切神の畔切は地名とも考えられる。

幕末のこと、伴信友(弘化三年没(一八四六))阿伎留神社貞樹宮司と鹿トを通じての、交信があつたが、『神名帳考証』の多磨郡阿伎留神社で、「祭神天コヤ子ノ命也」と記しているところを見ると、信友は阿留多伎家の系図を覽ていないことがわかる。天児屋命を遠祖とするのは中臣氏(藤原氏)であるが、吉田(唯一)神道においても天児屋命の後胤とする。

『新編武蔵風土記稿』によれば、阿伎留神社の祭神は「甘鋤(又は味鋤) 高彦根命にて円鏡を神体とす」とあるが、今日の祭神は大物主神、相殿に味耜高彥根神・建夷鳥神・天児屋根命と祀っている。祭神の大物主神は大和(奈良県)の桜井市三輪山に鎮座する大神神社を本社とし、大物主神を主神とする神社は全国に多く、主なる神社として二十数社を数える^③。維

新以後に祭神を大物主命に変更したのであろう。秋川を利用する運送業者が関わっているのではあるまいか。

五日市の地名は天正二年（一五七四）の文書が現在のところ、最古のものである。五日市村の寛文七年（一六六七）検地帳には上市場・中市場・下市場が記されており、往還に沿って活潑な取引が行なわれていた。出荷の産物は近隣緒村からの木炭・生糸・繭・黒八丈などであり、江戸へは五日市街道、秋川・多摩川の筏荷として送られた。^④しかし、江戸の五日市道の起点は多摩郡馬橋村を通る青梅街道から分れ南に五十メートル入って、直ちに西に向かって五日市に延びているが、馬橋村には五日市道の開削史料はなく、また継立（助郷）に関する記録もない。専ら青梅街道と甲州街道道筋の文書に限られている。^⑤五日市場の物資の主な集散は秋川・多摩川の筏が用いられたものと考えられる。阿伎留神社の祭神大物主神は、維新をむかえての産業の発達による祭神の変更であったと考えられる。境外末社に琴平神社（五日市入野峰）があり、伝承によれば、五日市村の名主が讃岐の金刀比羅宮に参詣した際に、分霊を勧請し、宮司が琴平神社を山上に鎮祭したという。時代は江戸以降と伝える。^⑥

二

武蔵大国魂神（大国魂神を中央に祀る）社は府中市宮前に鎮座、旧官幣小社である。創建が武蔵国造と考えられ、神代紀上の一書に、素戔鳴尊が天穗日命を生む。命は出雲臣・武蔵国造・土師連などの遠祖という。しかし、安閑天皇紀元年閏十二月の条に、武蔵国造を巡って同族の対立があり、平穩になった武蔵の一地域に国造による神社が創建されても、大国である武蔵国に相応の建立は無理であったであろう。おそらく、大国としての大国魂神社は国司による大宝三年（七〇三）の従五位下引田朝臣祖父をもって嚆矢とするものと考えられる（『続日本紀』文武天皇）。斎部広成撰『古語拾遺』によれば、聖武天皇の天平年中に神名帳が勘造されたが、中臣氏の専横によって、「由ある者は小き祀も皆列る。縁なき者は大なる社も猶

廃てらる。敷奏し施行すること、当時独歩なり、諸社の封税、総べて一門に入る」などの記述があり、また慶雲三年（七〇六）二月庚子の条に、甲斐・信濃・但島・土佐等の国の十九社に、始めて祈年の幣帛例に入る。分註に「其の神名は神祇官記に具さなり」とみえる。この記事にも中臣氏が干渉していたことになる。

岡田莊司氏編『古代諸国神社神階制の研究』⁹をみると、位階の奉授は天平神護二年（七六六）から天慶四年（九四一）、勲階は宝龜二年（七七二）から天慶四年に至る。小倉慈司氏によると、名神制度の成立は延暦年中と考えてよいという。¹⁰

武蔵国総社大国魂神社の創建は院政時代であろう。総社の初見は因幡国で康和元年（一〇九九）と伝える。¹¹総社大国魂神社は出雲系列の神社で、『吾妻鏡』寿永元年（一一八二）八月十一日の条に「武蔵六所宮」¹²とあり、国司による創建である。令制によれば、国司は国内の「社祀を掌る」¹³任務があり、また「祭祀に供する幣帛、飲食、及び菓実の属は所司の長官が親自ら檢校せよ」¹⁴というので、国内官社の新年幣帛などを供するのは国司（所司長官）が直接担当する。国司が奉幣する神社は、国内の式内社すべてが対象でなかったようである。武蔵国は『延喜式』神名で、十五郡四十三社を巡ることは不可能であったと思われる。武蔵国で大社というのは臨時祭中の名神祭に所載の足立郡の水川神社・児玉郡の金佐奈神社の二座である。

『類聚国史』神祇部祈年祭には次のような記事がある。「垣武天皇延暦十七年（七九八）九月癸丑に、祈年幣帛を奉るべき神社を定め、是れより先き、諸国祝等が年ごとに京に入り、持参する幣帛を受けるにつけて、「諸国の神社への道路が僻遠にして、その往還に難儀多し。今はすなわち当国の物を（幣帛として）用いよ」¹⁵と。この記事は祝部への往還を考慮して、畿内と一部畿外社を官幣社とし、諸国の幣帛物をもってする地域の神社を国幣社とする法令とみられる。祝部は『日本書紀』持統天皇八年（六九四）三月丙午の日に「神祇官の頭より祝部などに至る一百六十四人に絶布を賜う、各おの差あり」¹⁶とあって、また「職員令」神祇官の条には「伯一人 神祇祭祀、祝部……を掌る」とあるので、祝部は神祇官の配下にある神職であるが、祭事を司るのであって、神社には必要な職掌であった。国幣社が定まれば、その大社に祝を派遣し、定住した者

も多いはずである。^①

武蔵国総社六所宮

社殿名	神名社	祭神名	郡名	現住所
西殿	六ノ宮杉山大神 五ノ宮金佐奈大神 四ノ宮秩父大神	天照大神・素盞鳴命 八意思兼命知知夫彦命・天御中主命	都筑郡 児玉郡 秩父郡	比定不明 埼玉県児玉郡神川町 埼玉県秩父市番場町
中殿	大国魂大神 一ノ宮小野大神 二ノ宮小河大神	天下春命・瀬織津比売命 国常立尊	多磨郡 多磨郡	府中市住吉町 あきる野市二宮
東殿	三ノ宮氷川大神	素盞鳴尊・大己貴命・稲田比咩命	足立郡	埼玉県高鼻町

武蔵六所宮の六所とは、中殿に大国魂大神、東殿に一ノ宮小野大神、二ノ宮小河大神、三ノ宮氷川大神、西殿に四ノ宮秩父大神、五ノ宮金佐奈大神、六ノ宮杉山大神をいう。六社は何れも現地から勧請してきた分社である。当時の国司が幣帛を奉る神社を一同に会したといえる。三ノ宮氷川大神（足立郡）、五ノ宮金佐奈大神（児玉郡）の両社は、神祇官が預る大社とみてよいであろう。氷川神社は『新抄格勅符』第十巻抄の神事諸家封戸（神封部）に「氷川神三戸武蔵国神護二年七月廿四日符」とある古社で、明治四年に官幣大社、金佐奈（金鑽）神社は明治十八年に官幣中社、四ノ宮秩父大神（秩父郡）は昭和三年に国幣小社、貞観四年・同十三年に叙位・叙勲されたが、元慶二年（八七八）十二月八日己巳授従四位上勲七等秩父神四位下とある（『三代実録』）。貞観四年（八六二）には正五位上勲七等とあり、勲位は昇叙していない。橋本晴重郎氏は「元慶二年十

二月の水川神・秩父神に対する相次ぐ奉授は、同三年に発生した出羽俘囚の反乱（元慶の乱）鎮圧祈願・東国防衛と関係があると思われる⁽¹⁸⁾と述べている。官社に対する叙位・叙勲は官人とは別で、特に規定がなく、為政者の慣例による恣意的とも解される奉授といえよう。神社に対する叙勲は凶賊を靈験で討ち取る神験にあった。しかし神社に対する叙勲の上下には説明がない。秩父神社の貞観四年（八六二）の勲七等の叙勲は、同年五月二十日の「近者、海賊往々成^レ群、殺^二害往還之諸人^一、掠^二奪公私之雜物^一、備前国言、進^レ官米八十斛、載^二於一船^一、……而遭^二海賊^一、悉被^二侵奪^一、所^レ殺^二百姓十一人^一。是日……差^二発人夫^一、追^二捕海賊^一」とある瀬戸内海⁽¹⁹⁾の海賊が出没し、播磨・備前・備中など十三カ国の人夫をもつて追捕したという事件に対する叙勲であろうか。

叙勲の明確な史料としては、『続日本紀』の延暦元年（七八二）五月壬寅の条に、陸奥国司が陸奥内の鹿嶋神（『新抄格符抄』大同元年牒に「鹿嶋神二戸入陸奥国延暦元年五月廿四日符」）を祈禱して、「凶賊を討ち撓むるに、神験あり、望むらくは、位封を賽せんことを、勅して、勲五等と封二戸とを授け奉る。」⁽¹⁹⁾という記事がある。いうまでもなく、陸奥国の国司の推挙である。

さて、ついで六ノ宮杉山大神は都筑郡に属し、『続日本後紀』承和五年（八三八）二月庚戌の条に「武蔵国都筑郡⁽²⁰⁾粉山神社預^二之官幣^一、以^二靈験^一也」とある。続いて同書承和十五年（八四八）五月庚辰の条に「武蔵国无位⁽²¹⁾粉山名神從五位下」が奉授されている。杉山神社は位階を奉授される靈験を現わしたという。祈祷による靈験であろうが、明らかでない。しかし大國魂神社創建当時の国司が杉山神社を指定したことは、一般庶民にも知られた靈力ある神であつたのであろう。

一ノ宮小野大神は、大國魂神社と同じ府中にあり、『三代実録』元慶八年（八八四）七月十五日癸酉の条に「武蔵国從五位上小野神正五位上」とある。小野神社は宝龜三年（七七二）十二月十九日、太政官符神祇「⁽²²⁾奉^二幣帛神社事^一」に「太政官去天平勝宝七年（七五五）十一月二日符、武蔵国預^二幣帛社四處^一、多磨郡小野社・加美郡今城青八尺稻実社・横見郡高負比古乃社・入間郡出雲伊波比社、官符灼然、而時々班^二奉幣帛^一……」⁽²⁰⁾とあつて、小野神社などは古社で幣帛を預かつて

いた。特に大國魂神社では小野神社を「一ノ宮」にしていることは、国司にとつても存在感があつたはずである。

問題は二ノ宮小河大神である。現在は阿伎留神社と同じく「あきる野市」に所属する二宮神社である。武蔵国の古文書としては有名な鎌倉時代の建暦三年（一二一三）九月一日、源（大江）親広の下文案が当時の二宮神社（小河郷内）を物語る。文中に日奉（姓）小河直行は「元暦二年（一一八五）六月九日祖父宗弘帶讓与嫡男弘直証文之上……」とあれば、元暦二年以前に二宮神社の創建があると同時に、同郷の式内社阿伎留神社は存在感を失つたと考えられる。大江親広は阿留多伎氏と同様、その先祖は土師氏であるが、阿留多伎氏は二宮神社の地頭職をめぐる相論裁許に巻き込まれたのであろう。文章の概要は『東京都の地名』¹³の「あきる野市」小河郷から引用する。

小河郷は勅旨牧の小川牧の比定地でもあり、日奉姓の武士団である西党が勢力を伸ばしたとされる。武蔵国の在庁官人日奉氏は、この小川牧や由比牧（現八王子市）の管理を行いつつ武士化し、多摩郡の各地に分出していった。建暦三年幕府の要職にあつた源親広は、日奉姓小川直高と同族二宮忠久との二宮神社頭職をめぐる相論を裁許し、小川直高を二宮神社の地頭職に補任し、二宮神宮・百姓等に報じた。

武蔵国留守所も源親広の裁許をうけて同月七日、二宮神宮・百姓等に下文を下し、そのこと（直高地頭）を確認している。

小河直高と二宮忠久は『吾妻鏡』に載せていないが、一族の直系、直行などが幕府に仕えている。なかでも直季は仁治二年（一二四一）六月、不届の行状があつて出仕の停止、筑後国にある所領の半分を召し放されることがあつた。²³

武蔵国で国司の遙任を認めさせようとする動きは、藤原為房の『為房卿記』にみえる。²⁴

嘉承二年七月廿四日戊申……

武蔵守顕俊……

仲人々或近臣、或御乳母子、然而依_レ未_レ赴_二任国_一、不_レ賜_二素服_一、

「素服を賜わず」とは、堀河天皇が同年の七月十九日に崩御したので、天皇の近臣の者は素服（喪服）を賜わる例になつてゐるところ、源頼俊は康和五年（一一〇三）十一月一日の武蔵国司以来、一度も武蔵国に赴かなかつたらしく、そのために素服を賜わることがなかったという。この事實は、国司の制度の崩壊がうかがえる史料である。しかし曲りなりにも足利（源）尊氏は元弘三年（一二三三）八月五日に武蔵守を兼ねている（従三位²⁵）。尊氏は建武二年（一二三五）まで武蔵守であつたが、高重茂が建武四年から室町幕府の守護として任ぜられている。上杉顕定の武蔵国守護は文正元年（一四六六）からで、文明十三年（一四八一）で去り、関東管領は文正元年から戦死する永正七年（一五一〇）六月二十日に至る。

旧官幣小社大国魂神社の宮司である猿渡氏は「猿渡氏略系図」（『大国魂神社史料』第一輯）によると、巻首の兼延の条に武蔵国橘樹郡猿渡邑の出身で、後に小机莊佐江戸郷を領すとあり、猿渡氏は在地領主である。実信の代に国衛政所別当となり総社神主となる。兼資（六所大宮司）の代の元弘三年（一二三三）新田義貞が北条高時を討伐した際、戦功あり。建武二年（一二三五）足利尊氏叛き、兼資を味方に招くも応ぜず、ために尊氏は兼資の神領及び所領を没する。盛平（六所大宮司）の代に失なつた神領及び所領を復旧する。天正元年（一五七三）に卒す。盛道（二河守、六所大宮司）の代の天正十八年、豊臣秀吉が小田原の北条氏を撃つた際、氏輝に属して八王子城で戦死、盛房（六所大明神主）は寛政十二年（一八〇〇）三月に宗源神道の吉田家に「信濃守、従五位下」の官位を申請して（『六所宮神主日記』府中市郷土資料集10）、裁許状を奉授している。以上の略系図によると、猿渡氏は徳川家の入部によって後北条氏から離れ、本来の宮司職に専念して、今日に至っている。

三

五日市村の阿伎留神社の初出は、『続日本紀』卷四十六、光孝天皇元慶八年（八八四）七月十五日癸酉に、同じ武蔵国の

小野神、上総国の玉埼神、同姉前神、橘神、飯富神、建市神、田原神と併せて八社が左記のように叙位された。

授武蔵国正五位上勳六等畔切神從四位下、從五位上小野神正五位上、上総国正四位下勳五等玉埼神正四位上、正五位下勳五等姉前神、橘神、飯富神並正五位上、正六位上建市神、田原神並從五位下。

武蔵国の畔切神社は正五位上勳六等が從四位下で、上総国埴生郡の玉埼神社の正四位下勳五等が正四位上と、位階ならびに勳位は玉埼神社が上位にあつた。位階は昇叙しても、勳位の昇叙はなかつたことがわかる。古代の神社の勳位の昇叙は極く稀で、玉埼神社と海上郡の姉崎神社ともに元慶元年五月に勳五等とある。大社である大和国（奈良県）石上神宮のばあいでも、貞觀元年（八五九）正三位勳六等石上神從一位、同九年從一位勳六等石上神加正一位とあり、正一位になつても勳位は六等であつた。畔切神社は元慶八年に始めて勳六等に叙されたのであろうか。――神社の叙勳叙位は神に授けられるものであろうが、この稿では便宜上、神社として記述した。――畔切神社が元慶八年に上総国の神社と共に叙勳される勳功をさぐると、祈祷の靈驗による夷俘討伐、同書の陽成天皇元慶七年二月九日の条の、上総国市原郡俘囚の叛乱がある。史料中に武蔵国司の記述がないが、この当時、武蔵国司の記述がみえず、仁和元年（八八五）正月十六日壬申の条に、從五位上藤原朝臣貞幹武蔵守とある。市原郡は今日の市原市域にほぼ当たるといふ。建市神社（式外社）の地（市原市・旧郷社）である。

元慶七年二月九日丙午、上総国介從五位下藤原朝臣正範飛駅奉言、市原郡俘囚廿余人叛乱、盜取官物、數殺略人民、由是発諸郡人兵千人、令其追討、而俘囚焼民廬舍、逃入山中、商量非數千兵者不得征伐者、勅……直下官符差発人夫、早速追捕、……廿一日戊午、大政官符上総国司、平慮之狀奏聞訖、既成。

神（社）に対する位階の決定は、応和三年九六三以後の「奉加神位階事」によると、

神位階者、隨諸司諸国申請、上卿奉勅、先令下勘本位、奉加授奏、令内記勘作位記、附内侍奏聞之、請印訖、令頒給之。

以上の手続を踏んで、最終には天皇の奏聞があり、内印（天皇御璽）を受ける必要があつた。右の神階奉授の手続きは、

岡田莊司氏の解釈を参考にされたい。⁽²⁷⁾ 多磨郡の畔切神社が勲階六等を奉授したにもかかわらず、同郡の小野神社には勲階が授けられなかった理由は、勲位の数に制限があったものか。または畔切神社が秩父郡の秩父神社の勲七等（元慶二年十二月八日）より高い、武蔵国神社のなかで一位ということは、他の神社より霊力が優れていたのか。何れにしても、国内で著名な神社であったことは事実である。

畔切神社は『新編武蔵風土記稿』多磨郡五日市村では「阿伎留神社」とあり、明治以降に阿伎留神社と改めたのであろう。幕末には伴信友の指導の下に、鹿卜神事を執行され、現に「神伝鹿卜秘事記」（写本）、「占方畧式」（写本）を所蔵している。⁽²⁸⁾ そして秘事記には、巻末に「武蔵国造勲功一宮 畔切宝蔵」と墨書し、「武蔵国造／勲功一宮／畔切政所」の三行陽刻方四十七ミリの朱印を捺している。

しかし、天保元年（一八三〇）の五日市の大火で、阿伎留神社は本殿・拜殿・付属建物・神主宅まで一切を焼失してしまったので、神社に関する文書も失ったという。

神社の祭神は現在、大物主神、相殿に味耜高彥根神・建夷鳥神・天児屋根命である。江戸時代の祭神は風土記稿が伝える味耜高彥根神である。『古事記』上巻には大国主神が多紀理毘売命を娶って生まれた一神で、阿遲鉏高日子根神とあり、『日本書紀』神代下には味耜高彥根神、⁽²⁹⁾「古事記歌謠」には阿治志貴高日子根神、「出雲国造神賀詞」には阿遲須伎高孫根及命、『出雲風土記』意宇郡賀茂神戸に（大国主）大神の御子、阿遲須積高日子命、『播磨風土記』神前郡多駝里邑日野に阿遲須伎高日古尼命、『土左国風土記』逸文、土左郡の高賀茂大社の祭神を一節には大穴六道尊の子、味耜高彥根尊とある。何れの史料にも出雲系の神としている。土師氏の祖である天穗日命も出雲系の神であり、この稿の阿伎留神社（畔切）神社の祭神が出雲系であったことは自明の事実である。

なお、味耜高彥根神を主神として祀る神社の数社を掲げてみる。

1. 高鴨阿治須岐託彦根命神社 大和国葛上郡、式内社、奈良県御所市

2. 都都古和氣神社 陸奥国白河郡 式内社、福島県東白河郡棚倉町
3. 土佐神社 旧国幣中社、高知市
4. 阿自岐神社 近江国犬山郡 式内社、滋賀県犬山郡豊郷町
5. 鳴無神社 旧郷社、高知県須崎市
6. 田名部神社 旧郷社、青森県むつ市

土師氏系図（阿留多伎家蔵）

阿留多伎家蔵の系図が土師氏の系図と判断される根拠は、系図の遠祖が天穗日命で、神々の系譜の後に「武蔵土師連男塩」と記述されていることである。『日本書紀』をみると国造の記述の最後は、持統天皇元年（六八七）十月壬子の条に「皇太子率公卿百寮人等、并諸国国司、国造及百姓男女、始築（桧隈）大内陵」と、国司と並立して載せている。しかし、大化改新以後の国造は、国司が政務を司るのに対して、一国内の祭祀・神事を担当するものと解釈されている。²⁹

土師氏はもと土師連で、天武十三年（六八四）十二月己卯（二日）に宿祢姓を賜っている。³⁰阿留多伎家の系図にある「武蔵国造土師連男塩」の記録が事実を伝えていれば、一国の祭祀・神事を司る国造で、奈良時代にも任命され、連姓改姓後にも宿祢と改めることがなかったと考えられる。史料としては『続日本紀』神護景雲三年（七六九）十二月戊午の条に、「河内国志紀郡人外従五位下土師連智毛智賜姓宿祢」とみえる。この記事の前の大宝二年（七〇二）二月庚戌の条には「是日、為班大幣、馳馭追諸国々造等入京」とある。この国造も明らかに神社の祭祀・神事を司る官人といえる。なお、一国の郡の大領に当る神官を国造と執えている、その後の史料がある。それは『三代実録』仁和元年（八八五）閏三月十日乙未の条の左の記事である。この国造に対して直の姓を授けて

いること、しかも畔切神社に勲位が記されている元慶八年は、仁和元年の前年であることにも注目したい。下総国は上総国の誤記である。

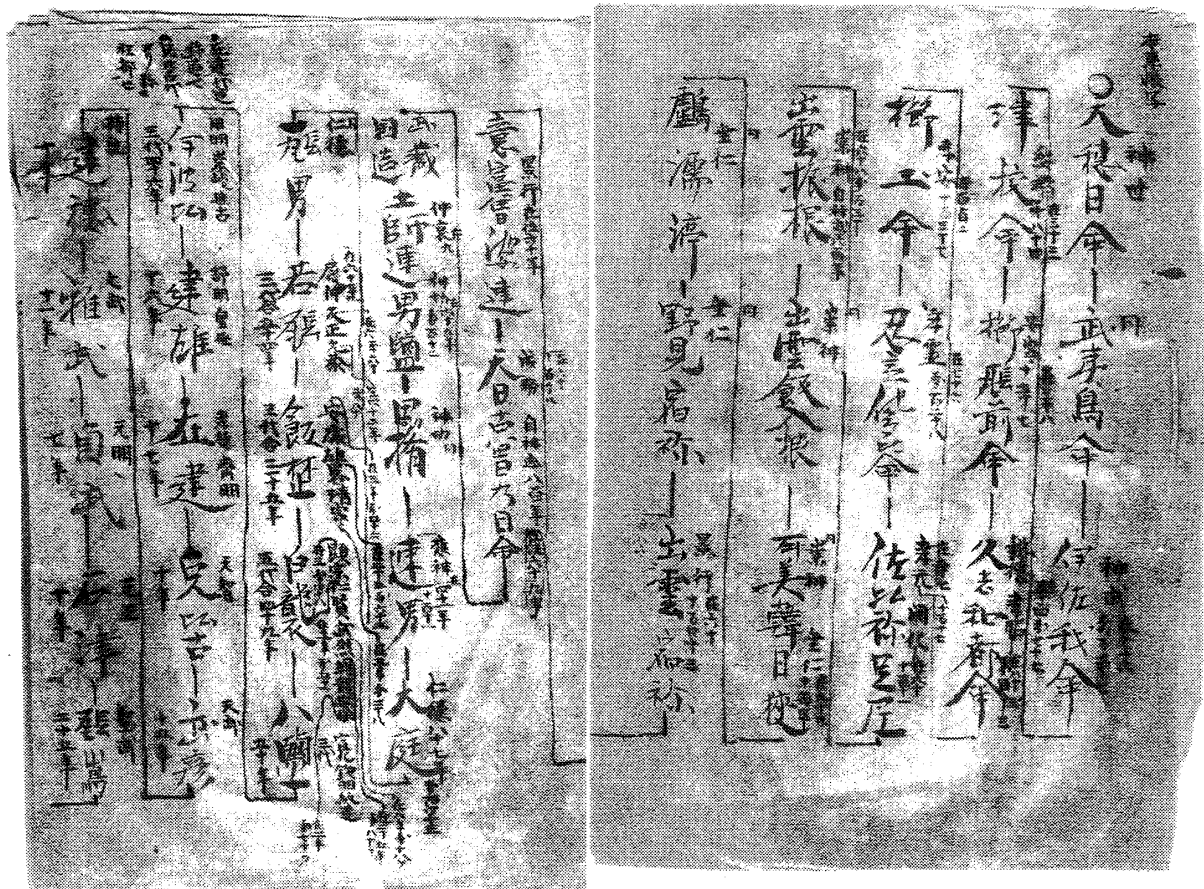
下総国海上郡大領外正六位上、海上国造他田日奉直春
岳。

〔系図〕

天穗日命 — 武夷鳥命 — 伊佐我命 — 津校命 — 櫛毬前命
↓ 久志和都命 — 櫛玉命 — 忍立化多比命 — 佐比祢足尼 —
出雲振根 — 出雲飯入根 — 可美韓日狹 — 鷗濡淳 — 野見宿
祢 — 出雲宿祢 — 意富曾婆連 — 天日古曾乃日命 — 武蔵土
師連男塩（以下略）

この系図は阿留多伎家で明治三年（一八七〇）に、当時の宮司阿留多伎貞吉氏が清書したものである。右側の朱筆の年代には問題があるので削除した。おそらく貞吉氏の加筆であろう。

土師系図の天穗日命が遠祖であることを示す系図は、『尊卑分脉』所載の菅原氏の畧系図であろう。巻首には「天穗



土師氏系図 阿留多伎家蔵（東京都）

日命十四世孫野見宿祢、垂仁天皇御世賜「土師臣姓」、三世孫身臣仁德天皇御世改賜「土師連姓」、十一世孫古人等天平元年六月廿五日改賜「菅原朝臣姓」とあり、菅原氏系図の初代宇庭の名前の下に細字で、「天穗日命後、天照大神第二子也、本姓土師宿祢、出雲臣土師連等祖也、成務天皇御子土師為_レ子」とある。この系図によると、土師は天穗日命から出て、野見宿祢が初祖（『日本書紀』）で、姓は臣であったが、仁德天皇の代に連姓となったという。しかし、天武天皇十三年に宿祢姓となったことは記載されていない。

この稿では以上の神がみの出典抽出にあたった。使用した史料は『古事記』『日本書紀』『風土記』『新撰姓氏録』『先代旧事本紀』『祝詞』などである。すでに佐伯有清氏が『新撰姓氏録の研究 本文篇』吉川弘文館 一九六二年七月刊。そして『新撰姓氏録の研究 研究編』吉川弘文館 一九六三年四月刊。『新撰姓氏録の研究 考証編六卷』吉川弘文館 第一卷一九八一年十二月刊。第三卷一九八三年八月刊。『新撰姓氏録 索引・論功編』吉川弘文館 一九八四年二月刊。という、古代姓氏に関する膨大かつ緻密な研究があることは承知のとおりである。したがって、佐伯氏の研究調査の再録と評価されても当然なことであるが、佐伯氏は阿留多伎家の土師氏系図を閲覧していないので、一部は新規の史料が紹介できよう。佐伯氏が引用した史料は土師氏に直接関係あるものに限って引用掲載したが、その外は土師氏系図に記載されている神名（漢字）と異なるものを対照して掲げた。

1. アモノホシノミコト 天穗日命

〔古事記〕上巻の天安河誓約の段に「天之菩卑能命」「天菩比命」。

〔日本書紀〕神代上の第七段の一書に「天穗日命、此出雲臣・武蔵国造・土師連等遠祖也」。

〔新撰姓氏録〕左京神別中、出雲宿祢「天穗日命子天夷鳥命之後也」、出雲「天穗日命五世孫久志和都命之後也」、右京神別下、天孫、土師宿祢「天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也」、山城国神別、天孫、土師宿祢「天穗日命十四世孫野見宿祢是後也」。出雲臣「同天穗日命之後也」、大和国神別、天孫、土師宿祢「秋篠朝臣同祖、天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也」、摂津国神別、天孫、土師連「天穗日命十二世孫飯入根命之後也」、河内国神別、天孫、出雲臣「天穗

日命十二世孫宇賀都久野命之後也」、和泉国神別、天孫、山直「天穗日命十七世孫日古曾乃己呂命之後也」、石津連「天穗日命十四世孫野見宿祢之後也」、未定雜姓、右京、山城国、恵我「天穗日命之後也」、和泉国、眞髮部「天穗日命之後也」。

〔先代旧事本紀〕国造本紀、上海上国造「志賀高穴穗朝（成務天皇）、天穗日命八世孫忍立化多比命定賜国造」、阿波国造「志賀高穴穗御世天穗日命八世孫弥都侶岐命孫大伴直大滝定賜国造」、出雲国造「瑞籬朝以天穗日命十一世孫宇迦部久怒定賜国造」。

〔祝詞〕遷却崇神「高天之原……諸神等、皆量申久、天穗日之命^乎遣而平^{氣武止}」、出雲国造神賀詞「出雲臣等^我遠神天穗比神」。

天穗日命を『古事記』は天之菩卑能命、天菩比命に、「祝詞」は天穗比神に作る。なお『古事伝』神代五之卷に、『出雲風土記』意宇都屋代郷にみえる「天乃夫比命とあるも、此神なるべし」と記している。さらに神名帳から、山城国宇治郡、因幡国高草郡、出雲国能義郡などに、天穗日命神社を指摘している。

2. 武夷鳥命^{タケヒナトリノミコト}

〔古事記〕上卷の天安河誓約の段に「故、後所^レ生五柱子之中、天菩比命之子、建比良鳥命、^{此出雲国造、无邪志国造、上苑上国造、下苑上国造、伊自牟国造、津島県直}武夷鳥^{タケヒナトリノミコト}從^レ天將來神宝」。

〔日本書紀〕崇神天皇六十年秋七月丙申朔己酉、「詔群臣曰、武日照命^{又云、武夷鳥}從^レ天將來神宝」。

武夷鳥は『古事記』に建比良鳥命、『日本書紀』に武日照命に作る。天夷鳥を祀る式内社を『古事記伝』神代五之卷で、因幡国高草郡天日名鳥命神社、出雲国出雲郡阿麻能比奈等理神社あり、さらに河内国天夷鳥命神社を指摘している。

3. 伊佐我命^{イサガノミコト}

〔出雲国造系図〕⁽³¹⁾「天穗日命子、武夷鳥命子、伊佐我命子」。

4. 津校命ツカリノミコト（『延喜式』都我利神カ）

〔出雲国造系図〕「天穗日命子、武夷鳥命子、伊佐我命子、津狹命子」。

5. 櫛咫前命クシミカサキノミコト

〔出雲国造系図〕「天穗日命子、武夷鳥命子、伊佐我命子、津狹命子、櫛咫前命子」。

6. 久志和都命クシワツノミコト

〔新撰姓氏錄〕左京神別中、天孫、出雲「天穗日命五世孫久志和都命之後也」。

7. 櫛玉命クシタマノミコト

〔新撰姓氏錄〕左京神別中、天神、小山連「高御魂命子櫛玉命之後也」、摂津国神別、天神、「高魂命子櫛玉命之後也」。

8. 忍立化多比命オシタテケタヒノミコト

〔先代旧事本紀〕国造本紀、上海上国造「志賀高穴穗朝、天穗日命八世孫忍立化多比命定賜国造」。

9. 佐比祢足尼サヒネノスクネ

〔先代旧事本紀〕国造本紀 嶋津国造「志賀高穴穗朝出雲臣祖佐比祢足尼孫出雲笠夜命定賜国造」。

10. 出雲振根イツモノフルネ

〔日本書紀〕崇神天皇六十年秋七月丙申朔己酉、「詔群臣曰、武日照命又云、武夷鳥從天將來神宝藏于出雲大神宮、

当是時、出雲臣之遠祖出雲振根主于神宝」。

11. 出雲飯入根イツモノイヒリネ

〔日本書紀〕出雲振根の条に続く。「是往筑紫国而不遇矣、其弟飯入根則被皇命」。

12. 可美韓日狹ウマシカラヒサ

〔日本書紀〕出雲飯入根の条に続く。「以神宝付弟甘美韓日狹与子鷗濡渟而貢上」。

13. 鷗濡渟ウガツクヌ

〔日本書紀〕前条に見ゆ。

〔新撰姓氏錄〕右京神別上、天孫、出雲臣「天穗日命十二世孫鷗濡渟命之後也」。

14. 野見宿祢ノミヌスクネ

〔日本書紀〕垂仁天皇七年七月己巳朔乙亥、「一臣進言、臣聞、出雲国有勇士、曰野見宿祢。同世二年秋七月甲戌朔己卯、皇后日葉酢媛命薨。……詔野見宿祢曰、汝之便議、宴洽朕心、則其土物始立于日葉酢媛命之墓、仍号是土物、謂埴輪。……天皇厚賞野見宿祢之功、亦賜鍛地、即任土部職、因改本姓、謂土部臣、是土部連等主天皇喪葬之縁也、所謂野見宿祢是土部連等之始祖也」。

15. 播磨国風土記イヒホ 揖保郡日下部里立野、「立野、所以号立野者、昔、土師弩美宿祢往来出雲国時」。

出雲宿祢イツモノスクネ

〔新撰姓氏錄〕左京神別中、天孫、出雲宿祢「天穗日命子天夷鳥命之後也」。

16. 竟富曾婆連オフソバノムラジ

〔新撰姓氏錄〕大和国神別、天孫、贊土師連「同神（天穗日命）十六世孫意富曾婆連之後也」。

17. 天日古曾乃日命アメノヒコソノヒノミコト

〔新撰姓氏錄〕左京神別中、天孫、人間宿祢「同神（天穗日命）十七世孫天日古曾乃己呂命之後也」（己呂を「日」に作る写本三種あり³¹）。

この最後の「17. 人間宿祢」については、佐伯氏の研究があり、引用させて頂く。³²

入間宿祢の旧氏姓は物部直。『続日本紀』神護景雲二年七月条に「武蔵入間郡人正六位上勲五等物部直広成等六人賜姓入間宿祢」とあるように、神護景雲二年（七六八）七月に、入間宿祢の氏姓を賜わった。」（『続日本紀』延暦九年三月丙午八日九日Vには從五位下入間宿祢広成爲常陸介とある。）天日古曾乃己呂は『西角井系図』に、天穗日命の八世の孫に天日古曾乃己呂命をあげ、その六世の孫に筑磨^{（磨力）}を掲げ、「物部直祖」とする」とある。

斯様にしてみると、入間宿祢は（『新撰姓氏録』左京神別中）天日古曾乃日命の後裔とするが、その実、土師氏より物部氏の系譜にあることになるが、もとより物部氏の遠祖は饒速日命であり、天穗日命ではない。阿留多伎氏の系図は前掲のとおり天日古曾乃日命を継いでいるのが、武蔵国造土師連男塩である。土師系図の新発見を期待して筆を擱く。執筆に際し、阿留多伎潔宮司、ならびに「あきる野市五日市郷土館」に対して改めて感謝申上げる。

註

- (1) 多磨郡之二十二之上。
- (2) 伴信友『神名帳考証』十七、阿伎留神社の条に「又、円鏡ノ如キ古銅物アリ面ニ畔切明神裏ニ天平十一年二月四日ト鑄付タリ、以上神主阿留多伎長門中臣貞樹ウツシオクレルガアリ、此地多磨郡ニテ今ハモハラ五日市松原村ト云フ」とある。筆者は信友のいう「円鏡ノ如キ古銅物」を拝見していないが、阿留多伎貞樹が中臣氏を称しているとするれば、阿留多伎家は土師氏の系譜でないことになる。
- (3) 今刀比羅神社（東京一、北海道二、徳島二、京都一）、三輪神社（山梨一、秋田二、愛知一、岐阜一）大神神社（岡山一）、鹿児島県一の宮神社、山口県二俣神社、島根県来待神社、鳥取県美取神社、静岡県二宮神社、石川県石浦神社、群馬県鷹巣神社、山形県水晶神社、東京都阿伎留神社などが上げられる（人物往来社「全国主要神社と主神」日本神社総覧神社本庁協力一九九二年刊）。
- (4) 五日市町発行『五日市町史』五日市「市」と伊奈「市」——参照、一九七六年十一月刊。
- (5) 馬橋村史編纂委員会『武蔵国馬橋村史』一九六九年十月刊。
- (6) 〔註〕（4）——神社——。
- (7) 『古語拾遺』至「天平年中、勘造神帳、中臣専権、任意取捨、有由者、小祀皆列、无縁者、大社猶廢、敷奏施行、当時独歩、諸社封税、總入一門」。
- (8) 是日、甲斐・信濃・越中・但馬・土左等国一十九社、始入祈年幣帛例。^{其神名具三}神祇官記。
- (9) 二〇〇二年八月、岩田書院刊。
- 史料は『続日本紀』↓『三代実録』、『日本紀略』『類聚三代格』『類聚国史』『類聚符宣抄』第一 太政官符太宰府（宗像宮）「……藤原純友凶乱和平之後、登坐正一位勲一等之階」天元二年（九七九）二月十四日。
- (10) 小倉慈司「八・九世紀における地方神社行政の展開」『史学雑誌』第一〇三編第三号、一九九四年三月刊。
- (11) 平時範『時範記』。

- (12) 北条政子安産祈禱のため葛西三郎清重を武蔵六所宮に派遣。
 (13) 職員令、大國、武蔵國は大國（『延喜式』民部上）。
 (14) 神祇令。凡供「祭祀」幣帛、飲食、及菓實之属、所司長官、親自檢校。
 (15) 垣武天皇延暦十七年九月癸丑、定可奉「祈年幣帛」神社、先是、諸國祝等每年入京、各受「幣帛」、而道路僻遠、往還多難、今使用「當國物」。
 (16) 賜神祇官頭至「祝部等」一百六十四人絶布、有差。
 (17) 『類聚三代格』卷一、神宮司神主宣事の条、太政官符、貞觀十年（八六八）六月廿八日「應以女為「祢宜事」の文面中に「諸社有祝、専主「祭事」とある。

(18) (註) (9) の書籍。「16武蔵國」一七一頁。

(19) 陸奥國言、祈禱鹿嶋神、討「撓凶賊」、神驗非虛、望「賽位封」、勅、奉「授勲五等封二戸」。

(20) 田中卓「新たに世に出た『宝龜三年太政官符』」（著作集10『古典籍と史料』國書刊行会 一九九三年刊。

(21) 竹内理三編『鎌倉遺文』古文書編 第四卷。

遠江守源親広下文案○藤原川上忠基一流家譜

下 武蔵國多西郡内二宮神官百姓等

可令早以日奉直高爲地主職事

右、直高与忠久対決之処、直高者、元暦二年六月九日祖父宗弘帶讓与嫡男弘直証文之上、弘直爲地頭之条、文治三年十二月十二日武蔵前司入道所成下之國符顯然也、忠久者、治承五年十月十日宗弘帶讓賜久長之假名狀、而此狀判形与直高所令帶之証文、判形依違之間、被尋判判之処、直高之伯父小河二郎自宗弘之手、所分得小河郷讓狀之判形与分賜弘直之讓狀判形同事也、仍任文書道理、以直高所補任地主職也、神官百姓等宜承知、不可違失、故下、

建暦三年九月一日

遠江守源朝臣（花押）

武蔵國留守所下文○藤原旧記小川氏文書

留守所下 二宮神官并百姓等

可早任御下文狀、以日奉直高、爲当社地頭職事、

右、九月一日御下文同七日到來、子細云々具也者、任御下文狀、以彼直高可爲地頭之狀、所仰如件、宜承知、依件用之、以下、

建暦三年九月七日「散位日奉宿祢（花押）、散位日奉宿祢（花押）、散位橘朝臣（花押）、目代藤原（花押）」

(22) 日本歴史地名大系、平凡社、二〇〇二年七月刊。併せて二宮神社を参照されたい。

(23) 『吾妻鏡』卷第廿四、仁治二年六月十六日壬申、小河高太入道直季被止出仕、是依「密懷源八兼頼筑後國御家人妻女」之科也、其上男女共可被召放所領半分云々、

(24) 『府中市史料集』（4）所載 一九六四年七月刊（府中市史編纂委員会）。

土田直鎮「武蔵の國司について」参照。

(25) 『公卿、補任』光嚴院正慶二年。

(26) 清水正健編『莊園志料』下卷 第十五編遠國一（武蔵國）橘樹郡小机保の条に、「久良郡の井ヶ谷、最戸、久保、別所、中里、弘明寺、永田七村は、俱に之を小机莊と呼ぶ」とある。角川書店、一九六五年十二月刊。竹田理三編『莊園分布圖上卷』武蔵(2)参照、吉川弘文館、一九九七年六月刊。西岡虎之助『莊園史の研究』三冊、岩波書店一九五三年。『講座日本莊園史5』関東の莊園、吉川弘文館、一九九〇年五月刊。西岡氏の研究以下、小机莊を挙げていない。

一四八 足利持氏御教書 応永廿六年八月廿四日 武州南一揆中

(5)『武州文書』下巻(角川書店 一九七八年三月刊) 阿伎留神社文書。

五〇 伝北条氏照印判狀 天正八年辰十一月

五一 北条氏照印判狀 寄進(千五百貫文) 天文^正十一年三月十日 大祝殿

五二 北条家印判狀 「定」 天正十五年七月晦日

五三 横地吉信書狀 九月十九日 高修御寺所方

五四 徳川家康寄進狀 寄進 大明神 拾石 天正十九年辛卯十一月 日

(6)武蔵国の神社(式内社)で、官社に列した六社。

一、荏原郡蒲田神社、同郡磐井神社、児玉郡金佐奈神社(『三代実録』所載)。

二、入間郡広瀬神社、播磨郡奈良神社(『文徳実録』所載)。

三、都筑郡杉山神社(『続日本後紀』所載)。